スクールカウンセリングで不登校生徒への母親面接

近　池　　操

キー・ワード：スクールカウンセリング，家族へのコントロール　母親への心理療法，表出的心理療法　家族との新しい関係

はじめに

スクールカウンセラーの活動のなかで最も多い学校からの依頼は、不登校生徒についての教師へのコンサルテーションや、生徒本人や母親への個別カウンセリングである。しかし「不登校」の背後には様々な原因や問題が潜んで、解決策も一様ではない。スクールカウンセラーは、担任の先生からの情報をもとに、不登校生徒の対人関係での特徴、学習面での達成度、精神的な健康さや発達の特性を査定して、担任の先生との共通理解を深めていく。そこでよく出されることは、生徒の家庭の問題である。教師は、不登校に限らず、生徒の問題行動と家族の対応のなかに、家庭の問題が凝縮して発現されていることをよく観察している。「家庭の事情というプライベートでデリケートな問題にどこまで踏み込めばよいか。」「家庭の問題に踏み込まなければ生徒指導ができない。」このようなジレンマは生徒指導の実際では必ず出てくる。スクールカウンセラーには、そのような「踏み込み方」への助言やサポートを求められていることが多い。

家族は、子どもの問題行動と家族の問題の関連ついてはどう考えているだろう。学校や周囲が悪いという他罰的な親や、問題に触れられることを恐れる親は、学校に協力的でなく、時には学校との間でトラブルがおきる。家族が子どもの問題からも、家族の問題からも目を逸らしてしまっている場合、子どもの問題はさらに困難な状況になる危険性が高い。

「子どもの問題解決に親がどう取組めばよいか相談したい。」という解決を求

める親は学校とよい協力関係を結べ、それは生徒にも反映されて、問題は解決のプロセスを辿る。そのような場合に、両親の価値観、これまでの子どもへの関わり、子どもの観察などをゆっくり考えていける時間と場所を提供できるのがスクールカウンセリングだ。

小此木ら（1086）は、親面接が児童治療の維持を目的とした補助的面接、母親の役割適応の援助を目的とした面接から、母親自身や家族の力動を扱う「母親のための母親面接」へと推移した過程を述べ、その経緯を「児童の側からの見方が主である態度」から「母親側からの見方を受け入れる態度」への変化であったとしている。

伊藤（1993）は思春期の不登校児の母親面接の経験から、「子どもの発した言葉は母親自身の無意識の欲望を言語化したものとして理解できる」と述べ、母親が自分の問題として子どもの問題を受け取った時、母子双方に解決がもたらされるとしている。

橋本（(1998）は「母親面接で母親が語る子どもの話は、子どもの事実を語っている他に、子どもの話を通して、母親自身が語られている」と述べている。そして「子と母は分かちがたく結びついている。子どもの言動には母親の無意識が表現されている。母親面接では、母親の語り（narrative）がいかに子どもの話題から母親自身の内奥に届くようになるかが目的となる。」と述べている。

「子と母は分かちがたく結びついている」という視点からは、母親を成長させようとする子どもの力という力動もみえてくる。思春期の子どもには親や教師をゆさぶる力がある。思春期の子どもの問題行動は親がもつ未解決の問題を暴こうという激しさがある。子どもは自分の問題行動を通して、親を相談室に送り出すのだ。

私はスクールカウンセリングの不登校生徒の事例で、母親が途切れなく話し、泣き怒るという混乱した心理状態の母親面接を経験した。カウンセラーはスクールカウンセリングという枠組みを考えて、女性の母親役割については支持的に対応し、母親が自分の問題を語るときは、表出的心理療法（O. カーン

バーク）を用いて、母親が子どもと自分の問題を区別して扱えるようにした。３年半の心理面接を経て、長女は通信制高校に通学して、母親はパートタイムで働いて、落ち着いた生活を取り戻した。

力動的な心理療法は無意識的な不安や攻撃性を意識的に扱えるように助けるので、ネガティブな感情が統合でき自我がより強くなるという効果がある。本事例では、母親が自分自身を見つめようとする意思があったので、力動的な心理療法的アプローチが効果的だったと考えられる。今後もスクールカウンセリングでは、家族の問題や母子関係へのアプローチが大切なテーマになっていくと考えられるので、本事例をもとに検討していきたい。

事例の概要

筆者が担当したスクールカウンセリングの事例である。中学３年生の担任教師より夏休み明けの２学期より不登校になっている女子生徒Ｉ子についての相談があった。Ｉ子は真面目な生徒で運動部でも活躍していた。夏休み前に友人関係でトラブルがあり、２学期から不登校になっている。担任教師が家庭訪問してもＩ子は部屋に閉じこもっていて会えない。母親が感情的に子どもを叱っているようなので母親のカウンセリングをしてほしいと要望があった。カウンセラーと母親の面接が設定されて、その後Ａは継続面接を希望した。

クライアント　Ａ　30代後半の女性　（主婦）

家族：夫（建設業）　長女Ｉ子（中３）　次女（小6）　Ａの原家族　父・母・弟　全て亡くなっている。

治療歴・相談歴　心療内科で抗うつ薬を処方してもらって、苦しいときに服用している。

宗教関係の人に時々話を聞いてもらっていた。

主訴：長女（Ｉ子）が不登校について

面接の経過のなかで、母親自身の問題が語られるようになる。母親自身に色々な身体症状があって治したい。（顔面神経痛、足のしびれ、肛門になにか詰まっている感じ。空気を飲み込みすぎる。緊張すると聞こえない。全身倦怠感

等）

臨床像　痩せ形で目が鋭く警戒心が強い様子。質素でカジュアルな身なりである。

生育歴：生家は建設業を営み、使用人も多い。父は優しかったが、母親は病弱で、家事能力が低く、家族に軽んじられていた。母親はＡには冷たく弟を溺愛した。Ａは小さい頃はほとんど話さない子どもだったが、中学生になると反抗的になった。短大卒業後事務職についたが、家事手伝いのために生家に戻り、現在の夫と見合い結婚して長女、次女を出産した。その後実家の経済状態が悪化して、父は別居し愛人に看取られて病死し、弟は負債を抱えて自死した。Ａはその破産手続きをして、数年後母を看取った。そのあと、Ａは、抑うつ的となって、家事ができなくなり、色々な身体症状がでるようになった。

アセスメント：長女（I 子）は抑うつ傾向、Ａの身体症状は転換性障害だが、その背後にパーソナリティーの問題みられた。認知の歪みがあり、Ａの心理的な葛藤が身体症状になったり、家族に転嫁されたりしている。Ａが自分の不安と怒りに気付いて、子どもに対して思いやりと見守る能力を回復できることがカウンセリング目標だと考えられた。母親が面接を希望しているので、母親面接を中心にしていくことにした。

面接構造：面接は長女と次女の中学校在籍期間だった。面接頻度はカウンセラーの出勤日と母親の希望で調節した。Ａの希望によって、５０分週１回と２週に１回の時期があった。面接間隔はＡの希望によって決めた。

面接経過では長女（Ｉ子）を長女とのみ記述する。

面接経過

Ｉ期　Ａと不登校の長女との間で、攻撃の応酬がおきる

（６ヶ月間　週１回　#1 ～ #20）

初回、Ａは学校に行かない長女に美味しい朝食を準備するが、長女はせっかくの朝食に手をつけない。長女への怒りの感情は反転して、子どもの不登校によって自分が非難されるのではないかと被害的になった。怒りの対象は、長

女、学校、世間へと広がっていった。そして突然話題を自分の生育歴に変えて、母親の作るお弁当が粗末だったこと、父親が愛人を作って倒産したこと、弟が自死したことを語ってぼろぼろと涙を流した。そうかと思うと「私の自律神経失調治りますか」と唐突に尋ねた。カウンセラーはAのあふれ出すような話し方にとまどい、ドラマティックな内容に圧倒された。カウンセリングはいきなりAの混乱に巻き込まれそうだった。カウンセラーは「あなたには、自分自身の問題と長女の問題の両方があるようですね。」「これまでのことと、今おきていることを整理して考えるといいと思います。」と問題の仕分けを提案した。カウンセラーはAにカウンセリングの枠組みを説明すると、Aはボランティアだと思っていたカウンセラーが専門家であることを理解してカウンセリングを希望した。Aは人間関係でも孤独だったようで「手帳にスケジュールが入るのはとても嬉しい」と話して、その後毎回定刻に来談した。

後のカウンセリング経過中に分かったことであるが、Aは何度か心療内科を受診していた。また近隣の宗教関係者の知人に話をきいてもらっていたようだった。そのため既に、話をして他者に理解をしてもらうことが、自分を楽にして問題を解決していくという経験があった。Aにとって「話したい、聞いて欲しい」というタイミングでのカウンセリンだったようだ。

Aは高揚した口調で、演技的な話し方だった。また話の内容は過去と現在、自分の生家のことと、現在の家族のことを錯綜させて途切れなく語り分かりにくかった。現在の家族についても、褒めたりけなしたりの差が極端だった。長女については、礼儀正しく真面目でお手本のような生徒だと話す一方で、なまけものだと罵った。次女はマイペースで淡々としていて、Aのコントロールから外れているようだった。Aは話の内容も混乱していたが、感情も泣いたり笑ったり怒ったりとしばしば変わり、区切りがなかった。

カウンセラーは初回で問題の仕分けを提案したものの、話の焦点を合わせる機会を奪われていた。これはAの一貫性を避ける思考や行動の様式を表していて、自分自身の無力感や罪悪感に触れないようにする防衛機制となっているようだった。繰り返しでてきた内容は、家族に美味しい食事をさせて自分は粗食

に耐えるという話と子どもの教育費のために生活費を削る話だった。Aは実家の破産で経済的な困窮を経験していて、現在も夫の収入が少なく、かなり経済的に切り詰めた生活の様子だった。Aは怒りを軸に話題を展開し、怒りの感情について、「腹が立つ」「私が悪者にされる」などと率直に話すことができた。Aの怒りは現状を好転させるポジティブな要素にもなっていると考えられた。そこでカウンセラーは「怒りはエネルギーにもなりますね。」と解釈すると、Aは「確かに私は死にきれないほどの怒りがあります。」と答えて「これがなければ生きていけないかも」と始めて自分の弱さにも触れた。

不登校で抑うつ的な長女との間では、長女を叩いたり責めたりして苛め、長女が怒って反撃すると安心するというサドマゾキスティックな関係が続いていた。長女との関係はある種のゲームのようで、親子の関係に奇妙な安定をもたらしていた。受験勉強ではAが参考書を買い集めたり、高校見学をしたりと積極的に活動したが、長女は進学に対してそれほど意欲がないかのように振る舞った。長女は引きこもり状態だったが、学力の蓄積があったので、高校に合格することができた。

Ⅱ期　仕事を持つことで、家族との距離をとりはじめる。

（1年間　2週1回　#21～#40）

長女は高校に入学後再び不登校傾向となって、Aはカウンセリングの継続を求めた。このときAの身体症状はほぼ消失していて、Aは「長年の夢だった。」というパートタイムの店員を始めた。Aの仕事は弁当店で食品を詰める作業だった。不登校ぎみの長女を、学校に送ってから出勤できること、食材が余れば自宅に持ち帰れることで、Aにとってはとてもよい条件の仕事だった。Aは新しい仕事を覚え職場の人間関係にも耐えた。そして面接でとても頑張っている様子を誇らしげに報告した。Aは「カウンセラーは冷静、私も冷静にならなくちゃ」と話した。

しかし高校生の長女は昼夜逆転と気分の波が大きくなった。Aは「子どもが元気に学校へ行くと、私は疲れが出てぐったりする。子どもが寝込んでいると私はしっかりしなければいけないと元気になる。変ですね。」と親子の裏腹な

関係を話した。Aは自分の心の動き客観的に振り返ることができるようになっていた。Aは長女を世話することで役割を得て元気になり、長女が自立していくと役割を失って寂しくなるようだった。

Aは抑うつ的な長女を強引に登校させようとすると、長女がよけい「固まる」と話したが、そこに長女の気持ちを考えようとする共感的な姿勢が乏しかった。

カウンセラーはAが自分の立場から娘をみていて、娘自身の発達や成長という視点に及んでいないと感じた。Aの話を支持的で探索的に聞いていくだけでは、Aが長女と建設的なよい関係を築いていくのに限界があると考えて、カウンセラーは教育的な助言を試みた。「思春期の長女が親に構われると反抗するのは自然なこと。子どもが自分の行動に責任がとれるように親は見守るほうがいいようだ。」と説明した。

Aは少しあっけにとられたような表情をみせて、「ああそうですね。」受け入れたかのようにみえた。しかしそれは表面上のことだったようで、その後「構うな」と言われたのが一番口惜しかったと話した。一方でAは友人に「子どもは構ってはいけないよ。親子は重なったらあかん。」と話すようになり、カウンセラーの言葉を受け売りしているようだった。カウンセラーとAとの間にも反発と取り込みという裏腹な関係ができていた。

長女は高校1年の学年末には中退となった。Aは学校に夫を連れて談判に行き、学校を批判した。Aは以前ならこんな時に英雄気取りだったが、「夫から、おまえが子どもを苦しめているのとちがうか」と言われたと話して、「学校にこだわっているのは私かもしれない」と内省した。カウンセラーに対しては「結局こんな結果になってカウンセリングは意味がなかった」と価値下げして攻撃した。

Ⅲ期　長女は単位制高校に通学し安定してくる。Aは自分自身について語るようになった。

（1年間　1週間に1回　#41～89）

長女は2年生から単位制高校に編入した。単位制高校はカリキュラムに余裕があったため、長女は自分のペースで生活や勉強ができるようになり、自律的

になった。Aは意欲の戻ってきた長女について肯定的になった。そして自分の気持ちを振り返るようになって、「自分について話したい。」とカウンセリング週1回を希望した。

Aは「長女を無理に学校に行かせようとしたり、学校の先生に抗議に行ったりすることを、私は楽しんでいた。」と振り返った。

Aは、夫について理想的な優しい夫だと言ったり、役立たずの電信柱だと馬鹿にしたりして、実像がつかめなかった。その夫への苛めについて、カウンセラーを試すかのように軽妙に話した。「一日中、身に付いたように意地悪しています。仕返しです。」と寝る場所や食事などでの冷遇を楽しそうに語った。そして別の回では夫が抑うつ的で繰り返し胃潰瘍になっていることを心配した。Co.は夫へのいじめの共犯や共謀をもちかけられているようで、居心地が悪かった。Aは真偽が定かではない、冗談のような話し方をすることが多かった。Aは結婚当初から夫に対して優位で、夫を蔑視しつつ依存する関係だったようだ。カウンセラーはAが夫にむけている怒りは、原家族との関係が投影されていて、亡くなった弟への怒りが転嫁されて夫に向けられているのではないかと推察した。また子どもたちが自立してきた寂しさから、夫に愛情を求めているけれども、それを素直に表現できずに屈折した形になっているとも考えられた。

カウンセラーが分かりにくいAの話を、聞き直し、怪訝な顔で対応すると、Aは「先生は本当かなという顔で聞いていた。私は小説家みたいに話を作る。」「私の話は恐いですか。みんなひきます。」「私は相手がしてほしいことの逆をして楽しむ。」「クイズを出すような話し方をする。」と自分の混乱した話し方や、屈折した感情を内省した。

カウンセラーは口惜しい気持ちを活かしていくことを提案し、罪悪感については「親になっても未熟さは残っている。だんだん成長していければよいのでは」と自分の考えを話した。Aは「ああそうか、未熟という言葉を手に書いて帰ります。」と納得したような笑顔だった。その後もAは「未熟」という言葉をもらって助かりましたと話している。

Ⅳ期　長女を虐待したことの罪悪感と、虐待の連鎖についての恐れを語る（10ヶ月間　２週１回　#90 ～ #101）

Ａのアルバイトが順調なのでカウンセリングは２週間に１回となった。Ａは穏やかな毎日の報告をする一方で、時々溢れるかのように泣きながら自分のことを語った。Ａ「人をへしおるのは簡単。弟の自死に私は関係している。」「亡くなった母や弟への怒りが、同じように要領の悪い長女や夫にむいてしまう。」「恐いのは弟と同じように長女や夫が自殺すること。」「私の家族はみんなうつ。私がうつにしているのかも」と自分のサディズムへの恐れと罪悪感を語った。また、Ａ「私は長女に虐待をした。父や母の看病で余裕がなかった時、嫌がる長女を塾にひきずるように連れて行った。長女が中学で不登校の時も虐待したが、その時は長女が反撃してくれて助かった。私は許してもらえるだろうか。」と語った。Ａは自分が家族に無理強いさせる傾向の原因は、母親から虐待を受けたからなのではないかと疑った。Ａにとって母親は冷たく頼りにならない人、困ったときだけ頼ってくる自己中心的な人だという記憶しかなかった。しかし自分の忘れている幼児期の記憶のなかに母親からの虐待があるのではないかと恐れていた。そして母からの虐待の仕返しを娘にし、娘はまたその仕返しを孫にするのではないか、自分も老後に娘から仕返しを受けるのではないかと、虐待の世代間連鎖を恐れた。

カウンセラーは「虐待の可能性に気付くことは、虐待を止める力にもなる。」「現在の親子関係が安定してきていることが大切だ。」と話した。Ａが「私はこれでいいんですか。」という質問にカウンセラーは「これでいいのか、自分で考えて」と促すとＡは「私は傷ついてぼろぼろですが、これでいいのかなと思います。」と答えた。両親のお墓参り話が出たが、早朝に一人で高い山の上の墓に昇るという話で、夢か現実か分かりにくかった。

Ａは「いつまでも、カウンセラーに頼るわけにもいかない。そろそろカウンセリングを卒業したい。」と話した。面接開始から３年が経ち、公立中学校のスクールカウンセリングの枠組みでの面接は期限が迫っていた。長女は通信高校３年生で専門学校への進学予定で、次女は高校進学の準備をしていた。これ

までAは子どもたちの進路選択について、A自身が色々な情報を集めて、担任と長時間の面談をすることを繰り返していた。しかし次女の高校進学については、次女と担任の話し合いを尊重して短時間で面談を終えて「あっけなかった」と語った。

Aは「何か楽になりました。」「実家に帰って話すようにしてここで話せた。長い間お世話になりました。」と感謝を述べてカウンセリングを終結させた。最後の言葉は「カウンセリングで一番助かったのは夫かもしれません。ここで話していたので、夫にむきませんでした。」とにっこり笑った。

考察

1．初回面接とアセスメントについて

クライアントにとって初回面接は、期待と不安が交錯した最も緊張する場面である。そして初回の語りの内容と語られ方はその後の面接の根幹に関わることが多い。

Aは初回から溢れるような話し方で、そこには助けを求める真摯な訴えがあった。しかし一方的で唐突な話し方だった。対人関係で誤解がおきやすく、トラブルも起こりやすいようだった。

Aは美味しい朝食を作る話から始めた。「焼き鮭、卵焼き、豆腐とわかめの味噌汁、炊き立てのご飯」等料理番組のようだった。その後も「肉の焼き方、特性ソース」「豚まんの食べ方」等食べ物の話が妙にリアルだった。食べ物は命をつなぐ糧で、食卓は家族が集う場所だ。食べ物への固執の背景に食べ物にまつわるトラウマがある可能性が考えられた。

Aは段々と語調を強めて言った。「娘が学校へ行かなければ、親の私が責められる。どうして私が責められるのか？」ここでAは被害的迫害的な認知によって怒りの感情に支配されてしまっている。周囲を敵に見立てていて、認知の歪みが形成されていた。

そして話は自分の生育歴に移っていく。実家の倒産、弟の自死、両親の病死等、家族の喪失体験が次々と語られた。ここではAの成育歴での心的外傷体験

が語られている。またその背後には、さらにその前の世代の心的外傷体験があり、それがAに凝縮されていることも考えられた。複雑性トラウマを体験をされている人だと考えられた。

Aはその後自分の身体症状（痛みと不安発作）について話して「心理的なものだと医師から言われたが治るか？」と尋ねた。心的外傷体験がもたらす不安や恐怖から不安定な対人関係か形成され、また一方で不安と恐怖が身体症状に転換されていると推察された。しかしギャンブルやアルコール等への嗜癖はなく、家族を護ろうとする健康な自我が機能していた。

初回面接とその後の経過から、アセスメントとしてAは「境界性人格障害」（DSM-5 精神疾患の診断マニュアル；アメリカ精神医学会版 2013）が最も近いと考えられた。DSM-5 では「境界性パーソナリティー障害」について「対人関係、自己像、感情などの不安定および著しい衝動性を特徴とする。見捨てられることに対して敏感で、そうなるのをなりふり構わず避けようとする。他者を過剰に理想化したかと思うと同じ人物をこき下ろすという具合に、その対人関係は極端で不安定だ。」と説明されている。

O. カーンバークは「境界型人格障害「について、より治療と結びつけた概念として「境界型パーソナリティー構造」という概念を提示している。そして「境界型パーソナリティー構造」とみなされるクライアントは慢性的な空虚感、矛盾した自己認知、矛盾した行動、他人に対しての認知の偏りがあり、面接者に対して自分のことを分かりやすく話すことができない。防衛操作のレベルでは境界例や精神病的なレベルのものが優勢で、特に分裂の機制が主で重要な人についての矛盾に満ちた経験を解離することによって葛藤から自我を守っている。そこでは原始的理想化や投影同一化、否認、万能感と価値引き下げがおきているが、自分の感情や行動の変化や矛盾については気にとめない。現実検討能力については、かなり保持されている。現実検討能力とは自己と非自己、内的世界と外的世界の区別をして、自分の情緒や思考と行動を通常の社会的規範に照らして評価する能力だと定義している。

さらに O. カーンバークは境界型人格構造について表出型心理療法という技

法を提示している。クライアントは心の中にある事柄を率直に継続的に話すことによって、ことばで表現する能力を高めていく。治療者は可能な限り中立性を維持し、明確化や直面化から出てきた情報をもとに面接のなかで「今ここで」の解釈につなげていく。そのような分析的作業によってクライアントは自己と他者を、一貫性のある、統合された、現実的な個人として経験する能力が高まっていく。これは部分自己表象と部分対象表象を全体対象へと統合していく試みで、クライアントの心のなかで解離されていた愛と攻撃性が統合され、クライアントが過去や現在とより現実的に折り合えるようになっていくことを援助する。

初回面接の終わりにAはカウンセラーに「私の病気は治りますか？」と尋ねた。ここにAの面接を受けることについての不安が凝縮していた。ここで主訴の流れを振り返ると、Aは長女の不登校の問題を主訴に来談したが、途中から主訴はA自身の心的外傷体験と心理的な原因からくる身体症状に変わってしまっている。この主訴の錯綜と混乱を整理していくことがこの面接のテーマになっていくと考えられた。

カウンセラーは「自分自身の問題と長女の問題」という２つの問題の仕分けと、過去の出来事と現在の出来事を区別して整理していくことを提案した。またカウンセリングの枠組みを説明した。するとAの表情はすっと穏やかになった。これは明確化や直面化によって、不安がコンテイン（W. ビオン）されたことを示していると考えられる。カウンセラーは面接の方向性を提示して、それはAにとっても同意できる内容だったので、よい協力関係が築けたと思われる。

２．家族の物語について

Aは幼少時ほとんど話さず陰の薄い子だった。しかし家業の没落で、その処理に奔走した。弟には多額の負債があり、アルコール依存症だった。弟はAにお金の無心をしてAが断った直後に自死した。Aは弟の自死に対して強い怒りと罪悪感を抱えていた。家族関係は崩壊していた。母を看取った後で、Aの抑うつと身体不調が始まった。

そのときAは30歳代で、夫と小学生の娘を二人持つ、4人家族だった。Aの精神的身体的不調を支えていたのが小学生の長女だった。その長女が中学3年生で不登校になった。

長女の不登校のきっかけは、長女の学校生活でのつまずきだった。しかし長女は幼少期から母親を心理的に支えてきており、その負担が蓄積していた。長女の不登校でこれまで保っていた、親子の均衡が崩れて、蓄積されていた問題が噴出したのだと推察される。Aが最も恐れていたのは、現在の家族が崩壊してしまうことだった。しかし問題の露呈は、問題を解決するチャンスでもあった。

終結が近くなった回でAは「両親のお墓参りのために山頂に登る話」をした。夢みるようなうっとりした話し方で心地よさが伝わってきた。Aが望んでいたのは、亡くなった両親や弟との和解や哀悼だったのではないかと推察された。

小此木は精神分析では喪の作業がとても大切なテーマだと書いている。そしてそれは一生続けられていく心の作業だと述べている。喪の作業を続けていけば、喪失されたものが、大切な記憶として納められ、現在を生きるための心の基地になっていく。Aの原家族についての喪の作業は現在の家族を大切にすることにつながっていったと考えられた。

３．Aの心理的成長と現実適応の改善

面接Ⅱ期で、Aはお弁当屋で働き始めて、仕事をする達成感と充実感を得ていった。Aの面接では食べ物の話が多く、それは空想か現実か分かりにくかった。しかしお弁当屋の仕事は決められたシンプルなもので、毎日同じ作業だった。Aにとって、この規則性が心理的な安定に役立ったようだった。この「お弁当屋」の仕事はAの食べ物についてのトラウマを修復する役割を果たしたと考えられる。

面接Ⅲ期で、長女は通信制高校に転入して、ゆとりがある生活ができるようになった。すると生活リズムが改善して元気に登校できるようになった。将来は資格を取得して専門職につきたいという目標もできた。

Aは仕事に行き、長女は学校に行き、お互いがそれぞれに居場所と活動を得た。

デビット・テイラーは仕事について次のように記述している。「人は自分が何者かという感覚や自分の価値、特に自分の有能感の大部分を仕事から得ています。」「仕事は人の人生に枠組みを与えてくれます。つまり、仕事は人が過去の思い出や将来の夢からなる内的な世界で身動きができなくならないように、ものごとを『今、ここ』という現実への結びつけてくれるのです。」

Aは終結が近づいた回で「私はこれでいいのでしょうか。」とカウンセラーに対して問いを出した。カウンセラーは答えずに「自分で考えてみて」と問い返すと、Aは少し沈黙して「私は傷ついてぼろぼろですが、これでいいのかなと思います。」と答えた。話し方は穏やかで、自分自身を労うかのようだった。

グスタフ・シェルマンは「感情的、経験的、認知的にコンテインされる経験を繰り返すことによって、患者はより強くなり、自らの経験に持ちこたえ統合を達成できるようになる。」としている。

自問自答は心理療法では最も大切なことだとおもわれる。カウンセラーはこれまで時々助言や励ましをしてきた。しかし面接は終結の時期にさしかかっていた。これからAが自分自身で考えて納得する答えを探していくことが必要だった。カウンセリングの最初に、カウンセラーは長女の不登校の問題と、A自身の問題の仕分けを提案した。面接の終結に際して、カウンセラーは「Aが考えること」と「カウンセラーが考えること」の区別を提案した。この提案は「中立性を保ち明確化や直面化しながら、今ここでの解釈をしていく」（表出的心理療法 O. カーンバーク）に示された「今ここでの」の解釈だった。

Aの最後の言葉は「カウンセリングで1番助かったのは夫かもしれません。ここで話していたので、夫にむきませんでした。」だった。

カウンセラーは、（ここでは何が話されていたのだろうか。）（夫には何がむかなかったのだろう。）と最後に再び謎解きをだされたように感じた。面接のなかでAは夫の虐めを楽しそうに話す一方で夫の胃潰瘍や「うつ」を心配していた。サディスティックな攻撃性には快感と依存性があり、死の淵に人を追い

込む非常に危険な衝動だ。そこには人が人として生きるときに決して超えてはいけない境界がある。カウンセリングはその境界を「行きつ戻りつ」しながら。生き残っていくことを探索していったのだと考えられる。そこには家族を破壊から護りたいというAの願いがあったのだろう。

面接当初、Aは切羽詰まって困惑した表情だったが、面接後期では穏やかな少し茶目っ気のある表情に変わっていた。話の内容は分かりやすくなって、落ち着いた応答ができるようになっていた。この表情と態度の変化が何よりもAの心の成長を表していると思われた。

＜付記＞本論文は日本心理臨床学会第22回大会での発表をまとめたものである。座長として貴重な意見を賜りました、乾吉佑先生、フロアーの皆様に厚くお礼申し上げます。また本事例のスーパーヴィジョンをしていただき、論文作成でもご指導いただきました高橋哲郎先生に深く感謝します。

参考文献

藤山直樹（1992）：子どもの心的変化の「容れ物」としての親面接について．思春期青年医学，2（2），199-210

橋本やよい（1998）：母親面接のNarrativeについて―語られた子どもの「複合的な意味作用」 心理臨床学研究，15（6），623-634

橋本やよい（1994）：母親面接の導き手としての「子ども」，山中康裕・岡田康伸編，身体像と心の癒し．岩崎学術出版社，43-50

早川すみ江（2002）：スクールカウンセラーとして関わった不登校生徒との心理療法　心理臨床学研究，20（5），453-464.

伊藤良子（1993）：子どもの言葉に現れた母親の無意識．伊藤良子博士論文，第９章

鴨澤あかね（2003）：不登校児の母親面接―公立教育相談室における援助　心理臨床学研究，２１（2），125-136.

Kernberg O F，Seizer MA，Koenisberg H W，Carr A C，Appelbaum A H（1987）：Psychodynamic psychotherapy of Borderline patients：Basic Books

Inc. New York. 松波克文・福本修（訳）（1993）：境界例の力動的精神療法
松木邦裕（1996）：対象関係論を学ぶ　クライン派精神分析入門，岩崎学術出版社
松木邦裕（2009）：精神分析的体験　ビオンの宇宙，岩崎学術出版社
小此木啓吾・延島信也・河合洋・岩崎徹也・片山登和子・山本允子・鈴木寿治・菊池正子（1969）：児童治療における並行母親面接（その 1､2）児童精神医学とその近接領域，10（3），160-179
小此木啓吾（2003）：精神分析のすすめ　わが国におけるその成り立ちと展望，創元社
Segal H（1973）：Introduction to the work of Melanie klein by Hanna Segal, Press Ltd.
London　メラニークライン入門　岩崎徹也（訳） H. スィーガル，岩崎学術出版社
高橋哲郎（2007）：精神分析的精神療法セミナー　発見・検討・洞察の徹底演習，金剛出版
David Taylor（1999）Talking Cure Mind and Method of the Tavistock Clinic 木部則雄（監訳）（2013）トーキング・キュア　ライフステージの精神分析　金剛出版
Levenson.E.（2006）Response to Jhon Steiner. International Journal of Psychoanalysis,87 321-324
Stainer.J（2006a）Interpretative enactments and the analytic setting. International Journal of Psychoanalysis,87 315-320
Stainer.J（2006b）Reply to Dr. Levenson International Journal of Psychoanalysis,87 325-328
Stern.D.B.（1997）Unformulated experience：From dissociation to imagination in Psychoanalysis. Hillsdale, New Jersey: The Analytic Perss. 一丸藤太郎・小松貴弘（監訳）（2003）精神分析における未構成の経験―分離から想像力へ　精神書房
大矢泰士（2009）逆転移とエナクトメントー米国を中心とする議論から。東京

国際大学臨床心理学研究。7．17-25
小松貴弘（2014）関係精神分析におけるエナクトメントの概念　心理臨床学研究 2014　Vol.31.6　1016-1025

（奈良県立医科大学非常勤講師・臨床心理学）